『ちくま評論選』解説

９　「贅沢」のすすめ

國分功一郎

■凡例

１　①②…は形式段落番号。◆は、設問。
２　▽は、本文の追跡・分析。
３　▼は、読解に関する技法。
４　☆は、記述に関する技法。

■前提　『現代文キーワード』で知識を押さえよ。（後から読んでもよい）

・第七章「現代社会」の総論、そして、「消費社会」を読もう。
・「観念」「記号」の意味も再確認しよう。

■追跡

①　突然だが、日常的にはよく使うけれど立ち止まって考えられることのほとんどない、とある言葉を取り上げるところから始めたいと思う。

②　その言葉とは「贅沢」である。

③　贅沢とはいったいなんだろうか？

④　まずはこのように言えるのではないだろうか？　贅沢は不必要なものと関わっている、と。必要の限界を超えて支出が行われるとき、人は贅沢であると感じる。たとえば豪華な食事がなくても生命は維持できる。その意味で、豪華な食事は贅沢と言われる。装飾をふんだんに用いた衣類がなくても生命は維持できる。だから、これも贅沢である。

⑤　◆問１贅沢はしばしば非難される。人が「贅沢な暮らし」と言うとき、ほとんどの場合、そこには、過度の支出を非難する意味が込められている。必要の限界を超えた支出が無駄だと言われているのである。

⑥　だが、よく考えてみよう。たしかに贅沢は不必要と関わっており、だからこそそれは非難されることもある。ならば、人は必要なものを必要な分だけもって生きていけばよいのだろうか？　必要の限界を超えることは非難されるべきことなのだろうか？

⑦　おそらくそうではないだろう。

⑧　必要なものが十分にあれば、人はたしかに生きてはいける。しかし、必要なものが十分あるとは、必要なものが必要な分しかないということでもある。◆問２十分とは十二分ではないからだ。

⑨　必要なものが必要な分しかない状態は、リスクが極めて大きい状態である。何かのアクシデントで必要な物が損壊してしまえば、すぐに必要のラインを下回ってしまう。だから必要なものが必要な分しかない状態では、あらゆるアクシデントを排して、必死で現状を維持しなければならない。

⑩　これは豊かさからはほど遠い状態である。つまり、必要なものが必要な分しかない状態では、人は豊かさを感じることができない。必要を超えた支出があってはじめて人は豊かさを感じられるのだ。

⑪　したがってこうなる。必要の限界を超えて支出が行われるときに、人は贅沢を感じる。ならば、人が豊かに生きるためには、贅沢がなければならない。

▽問い→答えの連鎖をたどる。傍線部で示してみた部分をたどるだけでも、ここまでの結論にすんなりと行き着く。「贅沢」を肯定する議論であることをまず押さえよう。

※この国の戦争の時代、「贅沢は敵だ」というスローガンがあった。それを誰かが、「贅沢は素敵だ」といいかえたというエピソードがある。國分さんは後者やな。

◆問１「贅沢はしばしば非難される」のはなぜか。

人は、必要の限界を超えて支出するときに贅沢だと感じるが、そのとき、（生命を維持するための）必要の限界を超えて支出するのは、無駄（不必要）なことだと考えるから。

①贅沢とは（定義）、②その状態に対する価値判断。この二つの部分に分けておくことが重要。なぜなら、この後、①定義はそのままで、②価値判断について、筆者は、常識とは異なった判断を示すからだ。（＝無駄なんかじゃない！）

「なぜ非難されるのか」に対し、「無駄だと考えているから」が答案の押さえ。

◆問２　「十分とは十二分ではない」とは？

「十分」については、本文通り。「十二分」について、少し言葉を足して言い換える。プラスアルファの余裕分を含むのが「十二分」。

（解答例）十分とは、必要なものが必要な分しかないということであり、必要を超えて、何かあっても対応できるようなゆとりがないということ。

⑫　とはいえ、これだけでは何かしっくりこないと思う。

⑬　お金を使いまくったり、ものを捨てまくったりするのはとてもいいことだとは思えない。必要を超えた余分が生活に必要ということは分かるし、それが豊かさの条件だということも分かる。だが、だからといって贅沢を肯定するのはどうなのか？

⑭　このような疑問は当然だ。

▽反論の想定。「お金を使いまくったり、ものを捨てまくったりする」のはいいことか？

⑮　この疑問に答えるために、ボードリヤールという社会学者・哲学者が述べている、浪費と消費の区別に注目したいと思う。贅沢が非難されるときには、どうもこの二つがきちんと区別されていないのだ。

⑯　浪費とは何か？　**浪費**（定義文）とは、必要を超えて物を受け取ること、吸収することである。必要のないもの、使い切れないものが浪費の前提である。

⑰　浪費は必要を超えた支出であるから、贅沢の条件である。そして贅沢は豊かな生活に欠かせない。

▽少し歩みを緩めて慎重に。**▼定義文は慎重に**。改めて定義されているということは、常識的な意味とは異なるのかもしれない。ふつう、「浪費」は悪い意味で使うでしょう？　ここでの「浪費」は、よい意味、悪い意味、どっち？

浪費（必要を超えた支出）→贅沢→豊かな生活！　全部よい意味だ！

⑱　浪費は満足をもたらす。理由は簡単だ。物を受け取ること、吸収することには限界があるからである。身体的な限界を超えて食物を食べることはできないし、一度にたくさんの服を着ることもできない。つまり、浪費はどこかで限界に達する。そしてストップする。

⑲　人類はこれまで絶えず浪費してきた。どんな社会も豊かさをもとめたし、贅沢が許されたときにはそれを享受した。あらゆる時代において、人は買い、所有し、楽しみ、使った。「未開人」の祭り、封建領主の浪費、一九世紀ブルジョワの贅沢……他にもさまざまな例があげられるだろう。

▽「浪費→贅沢→豊かさ」は、人類が求めてきた／求めるべきよいもの。浪費は、無制限な支出や使い捨てには至らない。どこかでストップするという〈智恵〉が内蔵されている。

⑳　しかし、人類はつい最近になって、まったく新しいことを始めた。

㉑　それが**消費**である。

㉒　浪費はどこかでストップするのだった。物の受け取りには限界があるから。しかし消費はそうではない。消費は止まらない。消費には限界がない。消費はけっして満足をもたらさない。

㉓　なぜか？

㉔　◆**問３**消費の対象が物ではないからである。

㉕　人は消費するとき、物を受け取ったり、物を吸収したりするのではない。人は物に付与された**観念や意味**を消費するのである。ボードリヤールは、**消費**とは「観念論的な行為」であると言っている。消費されるためには、物は記号にならなければならない。記号にならなければ、物は消費されることができない。

㉖　記号や観念の受け取りには限界がない。だから、記号や観念を対象とした消費という行動は、けっして終わらない。

㉗　たとえばどんなにおいしい食事でも食べられる量は限られている。腹八分目という昔からの戒めを破って食べまくったとしても、食事はどこかで終わる。いつもいつも腹八分目で質素な食事というのはさびしい。やはりたまには豪勢な食事を腹一杯、十二分に食べたいものだ。これが浪費である。浪費は生活に豊かさをもたらす。そして、浪費はどこかでストップする。

㉘　それに対し【読解問題１】消費はストップしない。たとえばグルメブームなるものがあった。雑誌やテレビで、この店がおいしい、有名人が利用しているなどと宣伝される。人々はその店に殺到する。なぜ殺到するのかというと、だれかに「あの店に行ったよ」と言うためである。

㉙　当然、宣伝はそれでは終わらない。次はまた別の店が紹介される。またその店にも行かなければならない。「あの店に行ったよ」と口にしてしまった者は、「えぇぇ？　この店行ったことないの？　知らないの？」と言われるのを嫌がるだろう。だから、紹介される店を延々と追い続けなければならない。

㉚　これが消費である。消費者が受け取っているのは、食事という物ではない。その店に付与された観念や意味である。この消費行動において、店は完全に記号になっている。だから消費は終わらない。

㉛　浪費と消費の違いは明確である。消費するとき、人は実際に目の前に出てきた物を受け取っているのではない。これはモデルチェンジの場合と同じである。なぜモデルチェンジすれば物が売れて、モデルチェンジしないと物が売れないのかと言えば、人がモデルそのものを見ていないからである。「チェンジした」という観念だけを消費しているからである。

▽「浪費」と「消費」の違いを整理しよう。問３はそのための問いだ。「消費」では、物を消費するのではない。では、何を？　直後の文をそのまま使えばいい。

◆**問３**「消費の対象が物ではない」とはどういうことか。

「人は消費するとき、物を受け取ったり、物を吸収したりするのではなく、物に付与された観念や意味を消費する、ということ。」

▽　記号（＝意味を表すもの）を「消費」する、といってもいい。実感が湧くだろうか。これもまた、常識とは少し異なる〈定義〉だ。ふつうは、物を買って、食べたり使ったりすることを、なんとなく消費という語で表現している。しかし、ここでは、おそらく現在の先進国の、消費社会と呼ばれる社会を前提として、私たちが、何に対してお金を払っているのか、を問題としている。その洋服を買うのは、それが保温に適しているからというよりは（それに対応できる服はすでに持っている）、何かこれ

までにない新しい感覚を表現している（＝記号）感じがするからだ。モデルチェンジしたものを買うのは、新バージョンと旧バージョンの〈差異〉に対して、お金を払っていることになる。その物、その機能、そのものにではなく、〈新しさ〉や〈情報〉を「消費」するのである。

関連しているので、読解問題１も片付けてしまおう。

【読解問題１】「消費はストップしない」とは、どのようなことか。

㉚段落に「終わらない」事態について述べられている。「消費者が受け取っているのは、食事という物ではない。その店に付与された観念や意味である。この消費行動において、店は完全に記号になっている。だから消費は終わらない。」

これを一般化して（**☆具体例を一般化**）、

（解答例１）「消費者が受け取っているのは、物ではなく、付与された観念や意味を表す記号としての物であるから、消費は終わらない、ということ。」六〇字

これで六〇字程度だが、八〇字～一〇〇字と指定されたとしたらどうするか。何を補う？　よくあるのが、**☆対比を補う**、だ。「浪費はストップする」が「消費はストップしない」という対比で書く。

（解答例２）「浪費は物の受け取りだから、そこには限界があり、いつかストップするのに対し、消費で受け取っているのは、物ではなく、付与された観念や意味であり、その受け取りには限界はないから、消費は終わらない、ということ。」一〇〇字

㉜　ボードリヤール自身は消費される観念の例として「個性」に注目している。今日、広告は消費者の「個性」を煽り、消費者が消費によって「個性的」になることをもとめる。消費者は「個性的」でなければならないという強迫観念を抱く（いまの言葉ではむしろ「オンリーワン」といったところか）。

㉝　問題はそこで追求される「個性」がいったい何なのかがだれにも分からないということである。したがって、「個性」はけっして完成しない。つまり、消費によって「個性」を追いもとめるとき、人が満足に到達することがない。その意味で消費は常に「失敗」するように仕向けられている。失敗するというより、成功しない。あるいは、到達点がないにもかかわらず、どこかに到達することがもとめられる。こうして

◆**問４**選択の自由が消費者に強制される。

▽「個性」を事例に、「消費」が否定的に描かれる。終わらない、ということは、永遠に到達しない、満足しない、ということを意味している。満足しないのがわかっているのに、永久に求めることを強いられる。こりゃ、不幸だ。「贅沢」はいいことだ、という話から、話題が「消費社会」の性質に移っていることに、注意。

◆**問４**「選択の自由が消費者に強制される」とは、どのようなことか。

「自由」なのに「強制」って？　この矛盾した表現を説明せよという題意と受け取る。「個性」という事例にもとづいて説明するのがポイント。

「個性」とは、他とは違うその人らしさを指す。人は、他とは違う自分らしさを自由に追い求めてよい。しかし、消費社会で生じているのは、消費社会が、消費者に、消費によって、「個性的」になることを求めているという事態である。

☆切り身にして補い、言い換えていくこと（Ａ）。もう一つ、「一見自由だが、実は強制」という論理に繰り込むこと（Ｂ）。

Ａ「選択の自由が／消費者に強制される」

Ｂ「選択の自由があるように見えるが／実は強制されている」

（解答例）「個性的であるために商品を選択する自由があるように見えるが、（商品は生産者が供給する物に限られ、）（また、個性が完成することなどないので）じつは、消費社会は消費者に消費によって個性的になることを求め続けていることになる、ということ。」

㉟段落の「生産者が売りたいと思う物しか、市場に出回らない」という観点も取り込んでみた。後半は、

「消費者は、消費し続けることによって個性的になることを強制されている」

と主語を立て替えても可。

㉞　消費社会はしばしば物があふれる社会であると言われる。物が過剰である、と。しかしこれはまったくのまちがいである。サーリンズを援用しつつボードリヤールも言っているように、現代の消費社会を特徴づけるのは物の過剰ではなくて稀少性である。消費社会では、物がありすぎるのではなくて、物がなさすぎるのだ。

㉟　なぜかと言えば、商品が消費者の必要によってではなく、生産者の事情で供給されるからである。生産者が売りたいと思う物しか、市場に出回らないのである。消費社会とは物があふれる社会ではなく、物が足りない社会だ。

㊱　そして消費社会は、そのわずかな物を記号に仕立て上げ、消費者が消費し続けるように仕向ける。消費社会は私たちを浪費ではなくて消費へと駆り立てる。消費社会としては浪費されては困るのだ。なぜなら浪費は満足をもたらしてしまうからだ。消費社会は、私たちが浪費家ではなくて消費者になって、絶えざる観念の消費のゲームを続けることをもとめるのである。【読解問題２】消費社会とは、人々が浪費するのを妨げる社会である。

【読解問題２】「消費社会とは、人々が浪費するのを妨げる社会である」のは、なぜか。

浪費は困るからだ。なぜ？　浪費は、満足をもたらすから。消費社会は、人々が**満足**するのを妨げる。なぜ？　消費し続けてくれなくてはならないから。ひっくり返して言うと、消費者が消費し続けることによって成立しているのが消費社会なのだ。

例によって、**☆なぜ→どのような（に）**、と問い直す。消費社会とはどんな社会？と問うてみて作ったのが、

（解答例）「消費社会とは、人々が（浪費がもたらすような）満足に至り、消費をやめてしまわないように、生産者が売りたいと思う物を記号に仕立て上げ、消費者が消費し続けるように強いることによって成立している社会だから。」

「消費社会は、…ことによって成立しているから。」でも、もちろん可。

現在の情報消費社会は、止まることをおそれる。消費が止まらないように、人々の欲望をかき立て続けられるように、商品が開発される。人々は、市場に出回る商品に依存することでしか生きられない状態に追い込まれる。自発的に消費しているようで、じつは次々に買うしかない（満足がもたらされない）状態に落とし込まれる。

㊲　消費社会において、私たちはある意味で我慢させられている。浪費して満足したくても、そのような回路を閉じられている。しかも消費と浪費の区別などなかなか思いつかない。浪費するつもりが、いつのまにか消費のサイクルのなかに閉じ込められてしまう。

㊳　**◆問５この観点は極めて重要である。なぜならそれは、質素さの提唱とは違う仕方での消費社会批判を可能にするからである。**

◆問５「この観点」とは。

直前の「浪費するつもりが、いつのまにか消費のサイクルのなかに閉じ込められてしまう」こと、というのがベース。「満足」というキーワードを入れよう。

（解答例）「（消費社会に生きる人々は）浪費して満足することがかなわず、いつのまにか消費し続けないといけないサイクルに閉じ込められてしまうこと。」

㊴　しばしば、消費社会に対する批判は、つつましい質素な生活の推奨を伴う。「消費社会は物を浪費する」「人々は消費社会がもたらす贅沢に慣れてしまっている」「人々はガマンして質素に暮らさねばならない」。日本でもかつて「清貧の思想」というのが流行ったがまさしくこれだ。

㊵　**【読解問題３】**そうした「思想」は根本的な勘違いにもとづいている。消費は贅沢などもたらさない。消費する際に人は物を受け取らないのだから、消費はむしろ贅沢を遠ざけている。消費を徹底して推し進めようとする消費社会は、私たちから浪費と贅沢を奪っている。

㊶　しかも単にそれらを奪っているだけではない。いくら消費を続けても満足はもたらされないが、消費には限界がないから、それは延々と繰り返される。延々と繰り返されるのに、満足がもたらされないから、消費は次第に過激に、過剰になっていく。しかも過剰になればなるほど、満足の欠如が強く感じられるようになる。

㊷　これこそが、二〇世紀に登場した消費社会を特徴づける状態に他ならない。

▽批判対象（仮想的）の登場。浪費→贅沢を悪者とし、「清貧」を説く思想だ。※中野考次『清貧の思想』は、一九九二年のベストセラー。

「贅沢だ」と批判するのは的外れ。筆者にとって、贅沢とはよいことだから。消費社会を批判するとしたら、どんな点を批判するべきか。浪費（満足）を奪い、消費（満足の欠如）を強いる点、だ。「満足の欠如」は、（あたかもある種の薬物のように）過激な欲望をかき立てていき、消費に依存する生活を強いる。考えれば、消費社会は恐ろしい。

【読解問題３】「そうした「思想」は根本的な勘違いにもとづいている」のはなぜか。

㊴段落にあるように、「浪費」と「贅沢」を批判している点が「勘違い」。消費社会は物がたくさんある。それに対して、物を少なく、というのが「清貧」の思想。しかし、筆者は、物がたくさんあるのは豊かなことで、よいことだという立場である。しかしまた、筆者もまた、消費社会には批判的だ。ただ、批判するポイントが、「清貧の思想」とは異なっている。

解答の要点は二つ。

Ａ　「浪費」と「贅沢」を批判するのはおかしい。

Ｂ　消費社会を批判するなら、消費（満足の欠如）を強いる点を批判せよ。

（解答例１：Ａ→Ｂ）「清貧の思想」は、消費社会が物を浪費し、贅沢をもたらす点で間違っていると説くが、浪費は豊かさを生むものであるから、批判の対象にならず、一方、消費社会が、満足を生まない消費を強いる点を批判していないから。

（解答例２：Ｂ→Ａ）消費社会に対しては、永久に満足を生まない消費を強いる点を批判するべきだが、「清貧の思想」は、消費社会が物を浪費し、贅沢をもたらす点を批判し、贅沢は豊かさを生むことを理解していないから。

筆者は、贅沢に価値を見いだそうという立場から、浪費と消費を区別し、消費の本質を論じています。覚えておくべきなのは、ここでいう消費の概念は、高度に発達した現在の資本主義経済に特有のものだということです。私たちは、こうでない社会をもはや想像できなくなっていますが、本当は違う選択肢も可能なはずです。「清貧の思想」が説く生活も、古代から受け継がれてきた智恵の一つです。國分さんのこの本も読みましたが、それもまた一つの可能性です。もはや消費の永続に我々の星は耐えきれなくなっているという認識だけは必要でしょう。